

「疑う楽しさ」を軸とした世界史の授業

藤本和哉*

1 はじめに

入学したばかりの高校生の中には、初めて接する世界史に期待している生徒がいる一方、無関心な生徒、「歴史＝暗記」という偏見を持つ生徒も多い⁽¹⁾。こういった生徒の関心をいかにしてこちらへ向かせるかは、どの教員にとっても日々の課題であり難題である。

私は教員になったばかりの頃、インパクトのある実物教材等を導入に使っていた⁽²⁾。この方法は生徒の関心をこちらへ向かせることに関しては効果的であったが、その関心には持続性がなく、見せた瞬間が山場になってしまうという難点があった。導入はあくまで導入でしかなく、その後の展開を充実させねばならない。そこで次に「～について考えてみよう」といった発問を多用する授業を試みた。これには「暗記科目だからつまらない」という生徒の先入観を払拭する目的もあった。ところが発問をしてから考える時間を充分にとっても、指名された段階で初めて「うーん…」と悩む生徒もいて、「考える授業」を展開しているつもりが結果的に「考えさせている授業」に陥ってしまっていた。指名されない限り考え始めない生徒が少なからずいることがわかった。

このような、以前に私が行っていた授業には何が欠けていたのか。前任校では他教科や中学校の授業を見学できる機会が多くあり、そこで気付かされたのは、それまでの私の授業に生徒の能動的な姿勢が欠落していることであった。それ以来「いかにして生徒に能動的な姿勢を維持させるか」が自らの課題となり、個別の内容やエピソードの興味深さに頼ることなく、授業の活動自体で生徒を前向きにしたい、と考えるようになった。目標が大きいので、現段階で満足のいく成果が上

がっているわけではないが、少しでも理想に近づこうとして行っている現在までの取り組みを以下にまとめた。

2 実践の概要

世界史に対して否定的、あるいは無関心な生徒をこちらへ向かせるにはどうすればよいか。それには授業にも「楽しさ」があり得ることを示さねばならないだろう。そこで年度当初のオリエンテーションで「知る楽しさ」「わかる楽しさ」「疑う楽しさ」について、世界史における例をあげてそれぞれ示すようにし⁽³⁾、その中でも「疑う楽しさ」を年度当初の授業で強く意識して展開することにした。具体的には、「原人は言語や火を使ったというが、本当だろうか？そのようなことを証明できるのか？」「農民反乱を機にいくつもの王朝が衰退・滅亡したというが、農民反乱にそこまでの影響力があるのか？」といった例をあげ、教科書に載っているようなものでも疑える可能性があることを示してみた⁽⁴⁾。この時点での目的は生徒を授業内容に向き合わせることなので、「考えさせる」のではなく、あくまで「こんなことも疑える」ということを示すにとどめ、「疑う楽しさ」を体感できるように意識している。こうして「疑う楽しさ」を体感してから、各自に疑うことを促していく。しかし教員から「疑いなさい」と言われて疑っても、それは「考えなさい」と言われて考えるのと同様、生徒の能動的な姿勢とは言いがたい。かといって授業の中で頻繁に生徒の疑問を取り上げる時間も実際はない。仮に各生徒が自由に問いをたてる時間を設けられたとしても、一部の活発な生徒のみが積極的になる反面、多くの生徒は受動的になってしまうことが容易

*筑波大学附属高等学校

に想像される。

どうすれば自ら疑うことが習慣となるか。現在試みているのが授業アンケートの活用である。そもそもは私自身の授業改善のために前任校の時から行っていたものだが、現在はその目的を残しつつも、生徒の疑問を集約することを主な目的として行っている。「疑問に感じたこと」「納得できなかったこと」「わからなかったこと」および「授業の感想」を数回の授業ごとに A5 判の用紙へ書かせている⁹⁾。本来ならば、授業の中や復習時に気づいたことを自分で追究していく姿勢が望ましいのだろうが、歴史好きを自任するごく一部の生徒以外にはそこまで期待はできない。しかしアンケートという形で振り返りの時間をとることによって、もともと関心が低かった生徒にも多くの場合で効果が見られている。アンケートを検証すると、生徒自身の中で漠然としていた疑問がそのまま放置されることを逃れ、明確な問いとして形成されていく様子が見て取れる。過日、大学院生による授業を受けた生徒の感想に「当時の国王はなぜそんなに宗教にこだわったのだろうか」というものがあつた¹⁰⁾。これなどは、もし授業中に同じ問いを教員から発したとしても、生徒がどれほど切実になって考えたかは疑わしい。授業の中では小さな気づきであっても、振り返りの時間をとることで自分なりの問いをたてることができるようになるのである。

こうしてたてられた疑問は本来ならば自分で追究すべきだが、そこまではモチベーションの面でも、スキルの面でも当初は望めない。そこで生徒から出た疑問を一覧にして配布し¹¹⁾、その中のいくつかを授業で取り上げている。生徒から意見を募る時もあるれば、こちらから解説を加える場合もある。「次は自分の疑問も授業の中で取り上げられたい」という気持ちを抱かせることでモチベーションの向上を期待するとともに、他人と疑問を共有できることも効果的だと考えている。教員からの問いよりも同じ立場である他の生徒が発した疑問の方が、生徒にとって切実なものにな

りやすいようで、他人の疑問のたて方に素直に感心する様子は、教員が問いを投げかけているだけでは見られないものだろう。

このように授業で疑うことを意識し、アンケートで問いをたてることを繰り返すうちに、授業のどの場面においても「本当だろうか?」という姿勢を持つことができる。そうすれば授業において多くを占める「聞く」場面でも能動的な姿勢を維持できるはずである。もちろんこちらも日ごろから疑問を持ち、自らの認識に批判を加えながら、それを隠さずに生徒へ提示し、いかなる内容も安易な説明に陥らないように心がけねばならない。また、生徒が疑問を持つ時間的余裕を生み出すため、授業内容の詳細はプリントとして示し、ノートに写させるための板書はしない¹²⁾。これらを徹底することで、生徒の中に「世界史の授業はとにかく問いをたてることが第一なのだ」との意識を持たせている。教員主導で「考えさせること」をどれだけ繰り返しても「自ら考えること」には結びつかない。疑問を持って問いをたてることこそが「自ら考えること」の出発点であり、これを授業の中で習慣化することができれば批判的思考 (Critical Thinking) が身につくと期待している。

3 今後の課題

以上のような考えに基づいて試行錯誤をしている毎日であるが、課題は多い。まず、そもそもの目的が「生徒の能動的な姿勢の維持」であったことから、問題設定・課題発見に重点が置かれており、現状ではその活動に授業時間をとられ過ぎている。疑問を持って問いをたてる次の段階、つまり問いを追究する活動には時間を割けていない。この点を補うため、夏季休暇や冬季休暇には自らたてた疑問を追究してレポートを作成することを課している。また、問いをたてることに生徒が慣れた年度後半の授業では、教員が発する問題を「考えさせる」ことも多く行っている¹³⁾。

しかし、問いをたてることに比べて、その問い

への対処法についてはまだまだ取り組み不足である⁽¹⁰⁾。今後、授業の中で工夫していくことはもちろん、科目や年度を越えた試みも必要だと考えている。

そして知識習得と疑うことのバランスも課題である。当然のことであるが、さまざまな場面で疑っていくためにはそれ相応の知識や技能が必要である。入学時の知識があまりにも少ない生徒は、授業で疑って考える楽しさを知り、それに知識が必要だとわかって、やはり知識習得でつまずいてしまう。しかし、もし年度当初の授業で知識を詰め込むことに主眼を置いた展開をすれば、知識不足の生徒だけでなく、ある程度の知識を持った生徒も辟易することが予想される。それほど知識がなくても疑うことができる教材を交えることで、生徒のモチベーションを下げないように配慮しているが、年度終盤には知識習得でつ

まずいた生徒と難なくこなした生徒の間では、試験結果だけでなく発問への返答やアンケート内容でも確実に差が開いている。もともと関心が低い生徒も含めて能動的な姿勢を維持させようとした結果、失っている部分もあるのではないかと。高校入学時の知識が少ない、と嘆くばかりでなく、知識習得の方法・在り方について真剣に考えねばならないだろう。それには授業内容だけでなく、定期考査における工夫も必要になってくるはずである⁽¹¹⁾。

このように課題は多いが、生徒の反応を見たり感想を読んだりすると、一定の手ごたえを感じるのも事実である⁽¹²⁾。ごく少数の歴史好きな生徒だけを相手にするのではなく、また関心が低い生徒に迎合して深まりの乏しい内容に陥ることもないよう、これからの授業を充実させていきたい。

註

- (1) 年度当初の授業感想に「もともと世界史は楽しみにしていたので、初めて聞く話ばかりで面白いです。」(2007年5月)「最初の授業で“ユダの福音書”の話になったときは、私も関心があったニュースだったので、高校の授業では教科書以外のことも教えて貰えるのかと感動しました。」(2006年4月)といったものがある一方、「一つの出来事に対していろいろな見方をするなんて歴史は奥が深いと思いました。でも私自身は、考えたりするのは苦手なので、歴史を学ぶのは本や教科書を読んでいるほうが好きです。」(2006年4月)「私は歴史が、暗記するのが苦手なのであまり好きではありません。」(2006年4月)といった否定的なものも多い。
- (2) 香辛料のサンプルや飛び杼、外国の硬貨や紙幣といったモノ教材の他に、大型の図版なども含める。

- (3) 本来なら厳密に分類すべきだが、生徒にわかりやすいことを優先してこのように単純化している。例えば「わかる楽しさ」については「“なるほど”と思えた時」と説明している。この3つは『学習指導要領』世界史Aの「内容とその取扱い」において多用される3つの文末表現(「～を把握させる」「～を理解させる」「～を考察させる」)から連想したものである。
- (4) 「疑う」ことを軸にすると、生徒は「どこまでを疑ってみるべきなのか」という戸惑いを抱える。これは「何をもって史実とするか」という歴史哲学へとつながる問題だが、授業においてそこまでは深入りしていない。ただ授業を進める中で、以下のような説明を行っている。まず教科書記述における「起こったこと」は「史実」とし、因果関係や背景などの部分は「解釈」であると便宜的に区分する。そして「史実」を疑うには新資料などの新たな証拠が必要で、一方の「解釈」

は既存の資料からでも異なる見方が可能であると。 「史実」を覆そうとする大がかりな例として「ユダ裏切ってない？ 1700年前の福音書写本解説」（『讀賣新聞』2006年4月7日）や「ルーズベルト“ドゴールは我慢ならない”米英が失脚を画策」（『朝日新聞』2000年1月10日）といった新聞記事を示した上で、「解釈」部分ならば高校生が教室で疑うことも可能であると示唆している。

- (5) 年度当初に「私は知的好奇心を全くもって持ちあわせていない，“受験に必要な知識だけ備われればいいや”という人間なので授業で聞いたことは全てあまり深く考えずに納得してしまいます。なのでわからなかった点も、納得できなかった点も、こうなんじゃないか？と思った点もありません。」（2006年4月）といった感想を書いてきた生徒が、その後の感想に「前に知識だけ教えて頂ければ良い、みたいなことを書いた記憶がありますが、やはりそれではだめだと思うようになりました。自分の頭を使って考えないと柔軟な思考力は養われないので、今の授業は結構良いと思います。」（2006年5月）と書いてきた例があり、一定の成果はあげていると捉えている。
- (6) 筑波大学大学院修士課程教育研究科による教員養成 GP「高度な授業力育成のための授業開発」の一環として、2007年10月12、13、14日に大学院生4名が「17世紀のオランダ」をテーマにした研究授業を本校で行った。この生徒が言及しているのはスペイン王フェリペ2世（在位1556～1598）による旧教政策のことで、宗教的対立の解決困難性や君主政の問題点などにも深めていくことができる疑問である。
- (7) 氏名は明らかにせず、提出された全ての疑問を掲載している。同じような疑問も多いが、それらも各自の表現で全て載せることで、各生徒が自らの疑問を全体の中で位置づけら

れるように配慮している。

- (8) 授業内容の詳細については配布プリントにまとめて短時間のレクチャー形式で行っているが、それに対して以下のような感想がある。「面白い内容もあるが、つまらない内容もある。例えば、アテネの重装歩兵の話は個人的に面白いと思ったが、知識をつめこむような授業もあったと思う。」（2007年5月）
- (9) 自分で追究していく姿勢を養う方法として、生徒が関心を持ちそうな内容（考える価値があり、なおかつ話の本線からそれるもの）を授業の中で意識的に完結させないことを試行している。この手法に対する反応には差があり、自分で追究することを促されている生徒がいる反面、以下のような批判的感想もかなりある。「先生の授業はおもしろいけれど、たまに、はっきりとした答えや結論がでない時があって困惑します。」（2006年5月）「なぜこうなったのかなど、論理的に説明してくれるのでとてもわかりやすいです。欲を言えば、1つ1つの疑問に関してのはっきりとした答えを言ってもらえると良いと思いました。」（2006年5月）
- (10) 「税がないアテネはどのように成り立っているのですか？調べたいのですが、世界史は広すぎてポイントしぼれません。調べ方を教えてください。」（2007年5月）というような要望もあり、世界史への関心は高まっている一方、それを授業の外で各自がいかにして深めていけるようにするかは今後の課題である。
- (11) 生徒にとって定期考査は切実な問題で、感想にも次のようなものがある。「とても楽しいです。今まで知ることが出来なかったことを知ることができて嬉しいです。でも、正直いえば不安もあります。授業では“考え方”を教えてくれるけど、嫌な言い方をすると、テストが心配です。どんな問題なんですか…でも話はドンドンふくらませてください！！」（2007年5月）

(12) 「この一年間の世界史の授業は、楽しかったし納得できる授業でした。ただ漠然と事実だけを学ぶのではつまらないけれど、その裏側の事情を知れば納得できるし、そういうことを続けていくことで、自分で疑問を持って、他のできごとについて考える時でも根拠の

ある考え方ができるようになるのだ、と思います。納得は大事！！」(2007年3月)といった感想が学年末には多い。しかし生徒が感想にどれほど本音を書くかは未知数で、いかにして率直な感想を引き出すかは授業改善の観点からも重要な問題である。